琵琶機関紙
京絃
第三四一号　京絃社

おんなの都（一〇）

落合一誠

皇妹和宮（3）

和宮は、堅く辞退した。然し若し降嫁が実現しなかったなら、天皇は退位を覚悟されていると聞いて、最早どうにも断り切れなくなってしまった。それは十五歳の少女にとって、余りにも重すぎる政略、運命であった。

まだ見ぬ江戸へなど行きたくはない。まして武家の妻になるなど死んでもいやだ。和宮は何とかしてこの宿命から逃れたいと願った。けれどもワナに落ちた小兎のようなもので、もがけばもがくほどワナがしまってくる。

兎に角、天皇のお力をもってすら救えないのである。と云って万一自害でもしょうものなら、それこそ天皇を苦しめるだけである。結局自分の一身を犠牲にする外はない。それならば自分が犠牲になる以外に道はない。

生ける屍（しかばね）――和宮には花嫁衣粧が死装束と映じたことであろう。泣く泣く同意した和宮は、誰の目にも哀れないけにえとしか映らない。反対に、政略のため降嫁実現を推進していた幕府方は愁眉を開いた。

彼等は女性一人の運命など意に介せず、彼等は単に政治家という一個の怪物であった。

この時、和宮は、五つの条件を提示した。明後年の先帝十七回忌が終ってから江戸へ下向すること。先帝の年忌ごとに御陵参拝のため帰洛すること。降下の後も和宮の身辺は御所風の生活をすること。その他女官のことなどについて五ケ条の要望を出し、それが叶えられなければ破約する。というのである。

しかし幕府は、是非共今年中に降嫁を実現させたいと云い張った。それは一日も早く皇妹を将軍の妻にして、反幕府勢力を押さえる道具にしたいためで、政略のためには和宮の気持ちなど構っておれないと焦っている。そのため、和宮の希望はもろくも打砕かれ、万延元年十二月二十五日、納采の儀を終えた。

幕府はその間に、プロシヤ、スイス、ベルギーの三国に新たに通商條約を結んでいる。これは、攘夷を目的として、和宮の降嫁を承諾された天皇には我慢出来ぬ背信行為で、約束を破ったのならば和宮降嫁も破談にすると、天皇は憤激を示されたが廷臣たちが取りなし、幕府も、七、八年後には必ず実行するが、現在の状態では事を荒立てると、忽ち外国との戦争になるからと、巧く云いくるめた。

しかし尊皇攘夷の志士たちは、皇妹の降嫁は体のよい人質だと云って激怒したので、再び幕府は志士弾圧をきびしくした。斯くして様々ないきさつの上に降嫁は実現した。

文久元年四月、内親王の宣下が行なわれ、天皇から親子の名を賜わった和宮は、いよいよ京都を去らねばならぬというので、母方の実家橋本邸をはじめ諸方へ挨拶に廻られ、石清水八幡宮、賀茂神社などの参拝を済まして、同年十月二十日、行列を従えて江戸へ出発されることになった。

朝廷側より権大納言中山忠能、岩倉具視などの公卿殿上人が、幕府側からは若年寄加納久徴が列に加わって、長い行列が京を離れていった。

この時、万一の場合をおもんばかって、道中は往来の多い東海道を避け中仙道を行くことになり、しかも沿道の警戒はこれまでに無いほどの厳重を極めた。けれども一万人近い人数を従えての道中は、和宮としては虜囚の旅に等しいものであった。

惜しまじな　君と民とのためならば
身は武蔵野の露と消ゆとも

そして、次第に江戸が近くなるにつれ、和宮の不安は、いよいよつのるのみだった。

絃旭宸▼うつぼ猿ー水藤五朗・絃旭彰▼綱舘ー南崎旭薫、石田旭呂、柴田旭容・絃旭鴻、旭風、小絃旭桂▼華道華の恵みー松元旭川、大津旭英・絃旭粧、旭史、旭神、旭鵬・生花四人▼茶道松風の曲ー吉島旭紅・絃旭利、旭章、旭呂、旭蓉・琴一、点前▼蓬萊山ー藤巻旭星、旭祐、旭恵・絃旭鴻、旭彰、旭鵬、小絃旭陽▼菅公ー会主藤巻旭鴻▼唐人お吉ー横野旭風・絃旭粧、旭桂・笛、立方各一▼天の羽衣ー林田旭史、内田旭章、平山旭苑・絃旭堂、旭山、旭憲・笛一、立方二▼大物の浦ー熊手旭宸、藤巻旭陽、藤巻旭彰・絃旭鴻▼那須与市ー上原まり▼城山ー須田誠舟▼若き敦盛ー原島旭粧・絃旭鴻、旭利、旭彰・笛一、立方二▼石田三成ー木庭旭山▼白虎隊ー山下晴風▼誉の水馬ー富樫旭桂▼伽羅の兜ー柴田旭堂▼対王丸ー柿木旭利・絃旭鴻、旭宸、旭彰・立方二▼大高源吾ー木原綾子▼二〇三高地ー会主藤巻旭鴻▼新琵琶楽そばの花、汐風乙女ー藤巻旭祐・絃旭堂外十一人・琴笛各一。

立川琵琶十周年記念演奏会

十月三日(日)昼立川市中央公民館、主催立川市、市教育委員会、市文化連盟、主管市琵琶研究会。第十回の演奏会で市文化祭参加。扇の的ー鈴木▼宇治川先陣ー佐々木▼本能寺ー小山羽水▼川中島ー小嶺妃水▼月下の陣ー工藤慈水▼西郷隆盛ー本橋填水▼坂崎出羽守ー加藤錦陽▼山科の別れー小川吐水▼松の廊下ー村木桜柳▼白虎隊ー中村修水▼彰義隊ー清水源城▼八甲田山ー坂井眺水▼うつぼ猿ー来賓木原綾子▼大高源吾ー来賓水藤五朗。

故前田秋声先生追悼演奏大会

十月十日(日)昼横須賀市文化会舘中ホール、主催上橋虎水氏、後援四絃富士会ほか。小栗栖の露ー会主土橋虎水▼那須与市ー白井▼湖水乗切ー本庄宵水▼川中島ー下村蒼水▼羽衣ー菅原秋穣▼父帰るー大坪碧水▼恩讐の彼方へー（録音）故前田秋声▼竜の口ー小保内真水▼戦艦大和ー森捧水▼新選組ー小関香水、采崎統水▼本能寺ー名古屋松浦秋翠▼木村重成ー富士久保田栄水▼唐人お吉ー石井桑水・舞一▼城山ー山田幻水▼敦盛ー東京田中光水▼村上喜劇ー同友吉鶴心▼伊豆の御難ー同桑名洲聖。外に詩舞一、詩吟九題

各流派琵琶合同大演奏会

十月十六日(土)昼京都商工会議所ホール、主催京都琵琶協会。会員の外来賓四氏出演で盛会であった。月下の陣ー藤井▼重衡ー近藤▼本能寺ー楊▼小督ー山田▼大徳寺ー桜井旭冨▼恩讐の彼方へー田中歌水▼大楠公ー矢吹旭津美▼白虎隊ー木下皇水▼桜田の泡雪ー山岡旭清▼坂崎出羽守ー岡本旭村▼舟弁慶ー来賓丹野鯱水▼巌流島ー同内田景水▼羅生門ー同竹本旭将▼曲垣平九郎ー同渡島旭鶯▼茨木ー岸本港水▼耳なし芳一ー西川磯水▼衣川ー梅原旭潯▼秋風故郷の山ー林旭萌▼上杉謙信ー会主平井春嶺。

第三回青壮年琵琶演奏会

十月十七日(日)昼東京赤坂公会堂、主催尾崎三郎氏。若き敦盛ー福田旭翔▼巴の前ー宮崎岳燈▼桶狭間ー黒沢玄城▼深雪ー吾妻江雪▼光秀の最期ー津和田岳聖▼浅間山噴火和讃ー寺内峰水（以上青年の部）▼安宅の関ー若宮旭登▼茨木ー髙田栄水▼忠度ー金森旭弾▼白虎隊ー青木早水▼戦艦大和ー押川旭葉▼石童丸ー白土椋水▼義士の討入ー網野桜苑▼川中島ー渋谷劔水（以上壮年の部）外に吟詠八題。

戸倉旭嶺氏

九月二十七日肺がんのため逝去、享年七十七歳。筑前琵琶大津旭会長、京都琵琶協会々員、戸倉商事株式会社々長。筑前琵琶の宣伝につとめた功労者で「堅田落」などが得意曲であった。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。

あとがき

秋まさに酣●澄み切った青空のもと、煌々と照り輝く月を仰ぎながら好きな琵琶の一曲を無心に奏でることは何物にも代えがたい喜こびである●秋は燈下親しむの候と云われるが、われわれには同時に秋は琵琶に親しむの候である●ここしばらくは暑からず寒からずの最も良い季節であるが、やがて遠からず訪づれ来る冬に備えて充分の自重が大切であろう●閑話休題。いつも申し上げるように現代琵琶人の大多数は年輩者である。お迎えが来て極楽へ旅立つ人や、視力が衰えて、と云う〝京絃〟の読者が段々減ってゆくのは誠に淋しい限りで、この意味でも若い琵琶人を養成して次代に備えることは目下の急務である●その手段の一つとして若者が歓迎するような平易で新しい歌詞の作詞作曲を発表するのも一方法であろう●詳しくは考うべし。

〒565　昭和五十七年十一月一日発行非売品
編集発行者　村上　寞
吹田市山田東一丁目三一　絃水社
電話〇六(八七五)〇三二六番　B六一四

四絃漫筆

島津天嶺

(十四) 琵琶歌雑考（一）

琵琶歌は文芸作品であるから、四百年の昔から薩摩の國で歌われてきた歌や、明治以降おびただしく作られた琵琶歌を古典的文芸として研究する人が、もうでてきてもおかしくはないと思っているが、寡聞でまだこのようなことを聞いていない。

ただ、これらしいことがひとつ。それは故萩原竜洋先生が喜寿記念として出版された「注解薩摩琵琶歌集」の終りの方に、先生の令甥でこの本の注釈をされた千田幸夫先生が、この時読まれた二百十余曲の歌について分析し、感想をまとめられた文が所載されていて、鹿児島大学には、もっと詳しい論文があると述べられていることである。残念ながら千田先生も亡くなられたと聞いているが、誰かが先生の跡をついで引続き研究されているか、又千田先生の論文はどんなものか、先ずこの調査をしたいと思っている。

さて「注釈薩摩琵琶歌集」の千田先生の文を読んで感ずることの第一は、薩摩琵琶がその詞章も曲節も全く口伝によってのみ伝えられたということである。私もそのことは聞いてはいたが、少くとも原作者は最初何かに書いたであろうから、どこかに何かが残っていないか、又雅楽声明平曲など何れも音調を記号で表わしており、このことを薩摩の人も知らぬ筈はないのに、このような手段をとっていないのは何故かと、ある鹿児島の琵琶人におききしたことがあるが、「物事をむづかしく考えないで本質だけに取り組む、これが薩摩の特長でしょう」といった主旨のご返事を頂いたことがある。しかし私にはどうもそれだけではないような気がしてならない。

琵琶は薩摩の「國家機密」ではなかったか、幕府や他國に知られることを恐れていたのではないか、そこで少くとも物証は残さぬという施策を、いつかとったのではなかろうか、これが私の夢のような憶測であるが、一度鹿児島の郷土史家の方にでも尋ねてみたいと思っている。

次ぎに感じたことは、昔の琵琶歌には今も歌われている賀の歌（例えば春の調）、釈教の歌（例えば武蔵野）、戦記物（例えば木崎原）の他に、恋の歌や道行の歌も多くつくられて歌われたということで、私もこの随想で「武骨性」を強調したことがあるが、案外に琵琶を抱いて思いをやる情緒的文人的な面もあったようである。

もっとも薩摩の國も一時期軟弱に流れたこともあるので、その頃に集中的につくられたのかも知れぬ。何れにしても古歌の作者や作られた時代を考証することが必要のようである。

なお、このような恋の歌は、明治の時代に入り薩摩琵琶が東京に進出した頃になると、世は富國強兵の一色におおわれ、ついで日清日露の戦争となるからその出番がなくなり、現在でもまだよく歌われる「物狂」は、ざん言によって君側を追われた忠臣が、君を思って作った歌であるといった牽強付会的な理由をつけて歌われていたようである。

私はこれから、このような情緒物の琵琶歌を調べてみたいと思っている。千田先生の文によると、明治二十六年より刊行された蒲生清隆篇の「ますらをの友」（全五巻）に収載されているとのことであるから、次の鹿児島行きのときには是非どこかで探し出したいものだと思っている。

ついでながら本随想(六)鹿児島行のなかで、私は薩摩琵琶歌プロパーの本としては寺尾彰先生編の明治三十四年初版の「薩摩琵琶独案内」が最も古いのではないかと書いたが、この七月町田市の尾関皆吉（絃陽）先生のお宅で「藪鶯」という明治二十七年五月初版の本があることを知った。尾関先生御秘蔵のものは第四版であるが、琵琶の弾奏家又琵琶歌作者として著名な吉水経和（錦翁）先生の自作琵琶歌集で、現在も愛誦されている川中島、桜狩、吉野落二段など十六篇が収められている。

吉水先生が鹿児島から東京に出られ、薩摩

の薩摩琵琶を日本の薩摩琵琶に換骨奪胎されたことは周知のことであるが、日清戦争の前にこのような立派な本を出されていたのにはほんとうに驚いてしまった。

吉水先生の伝記などどこかにないものか。

吉水先生が琵琶楽史上に残した足跡の偉大さをつくづく思い知らされた次第である。

壇の浦古戦場 平家の亡霊

辻　旭城

治承四年（一一八〇）八月、源頼朝は源氏再興のため伊豆で兵を挙げ、続いて九月、信濃で挙兵した木曽義仲の都入りで平家は西へ落ちのびたが、義仲も横暴を極めて後日河法皇の激に触れ、勅命を受けた義経軍によって近江粟津で今井兼平と共に悲壮な最期を遂げた。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無情の響あり、沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕わす……。」と、平家物語に書かれた平氏の末路は悲惨なものであった。

平大納言時忠は、従一位賜左大臣時信の長男で、清盛の妻時子と、後日河法皇の妃滋子が姉妹という平家切っての名門であり才人であったが、一門が壇の浦に滅亡して敗軍の将となり、源氏の若大将義経に捕えられた。三種の神器のうちの八咫鏡を守り、源氏に従ったので死罪を免れたが、それには時忠が、娘の蔵姫を義経に差し出し、義経は正妻と別居するほど気に入られたことによるのだという。

やがて時忠の流罪がきまり、姫を含めた主従十六人が舟で能登の片田舎に着いた。それは文治元年九月二十三日のことだった。

長途の疲れと行く末の不安に一行が茫然としていると、一羽の烏が現われて道案内をしたという。その土地が京の大谷によく似ているのでそのまゝ大谷と名づけ、ここに仮住居を建て、五年後の元久元年（一二〇四）四月時忠は六十歳でこの地で亡くなった。

御年八歳の安徳天皇は、文治元年（一一八五）三月二十四日、長門壇の浦の戦いで源氏勢に敗れ、清盛の妻二位の尼時子に抱かれて海中に身を投じた。

安徳幼帝について巷では、死亡説と生存説の二つが伝えられている。高倉天皇を父に、清盛の娘建礼門院徳子を母に持つ安徳帝にとって二位の尼時子は外祖母にあたる。

安徳天皇入水について〝平家物語解説〟をひもどいてみた。それによると「このとき天皇はご容美しく四辺照り輝くばかりで、長い黒髪は背中にまで垂れ下っていた。敗戦を前に女人たちは軍船の中を塵一つも残さず掃き清め、宝剣を腰に、天皇の手をとった祖母に〝われをいづ地へ具して行かんとするぞ〟と驚いた様でたずねる。二位の尼は涙をこらえて〝この國は粟散る辺地とて心憂き境にてさぶらへば、極楽浄土とめでたきところへ具し参らせさぶらふぞ〟と答へる。そして〝波の下にも都のさぶらふぞ〟と慰め、帝を抱いて入水した。」とある。華やかな平家の末路を語る美しくも哀しい場面である。

一方〝吾妻鏡〟では、帝を抱いて入水したのは按察の局であって、二位の局は宝剣を持って沈んだと記されている。安徳天皇や二位の尼時子のほか、経盛或いは宗盛・清宗親子のように死を怖れてうろうろするうちに、戦友によって入水した者も多くいたという。

合戦が終って、帝の母建礼門院時子や按察の局は、源氏の武士たちに海から引き上げられて救われたし、外にも何人かの平家武将が捕虜となった。しかし安徳天皇と二位の尼はついに引き上げることができず、遺体も発見されなかった。宝剣も同様沈んだままだった。然し安徳帝は実は生きていたのだとする説が次ぎから次ぎへと生まれ、その子孫を名乗る人も現われた。

生存説では、入水したのは天皇ではなく、「御ぐし黒う優々として御せなかすぎさせ給へり」と平家物語に書かれたような、天皇に姿かたちの似た女の子の替え玉だったのだという。平有盛の娘、或いは大納言時房の娘（七歳）が身代わりの主といわれている。そして源氏の追手を逃がれた天皇が、後にこの地で亡くなったとする陵墓が、西國の各地に沢山ある。

たとえば、対馬の厳原に辿りついた天皇は、この地で長く生き七十余歳で天寿を全うされたという。また、鹿児島薩南にも天皇や平家武将たちの墓があり、天皇は六十八歳で亡くなられたとか、或いは四國祖谷山、横倉山、山陰の國府などの説もあり、一方下関阿弥陀町には、天皇を祭った赤間神宮があって、その水天門の左に安徳帝を葬った阿弥陀寺陵が縁に包まれている。

ここは源平合戦の哀史を秘めた壇の浦古戦のあたりで、帝をはじめ平家武者の霊を慰さめるため、建久二年（一一九一）に建てられた阿弥陀寺が赤間神宮の前身で、有名な小泉八雲の怪談にある〝耳なし芳一〟の舞台でもあり、赤間関を航行する船は長い間平家の亡霊に悩まされたという。

またこの辺にいる平家ガニは、その甲羅の形が奇異なため平家の怨霊がカニに乗り移って、グロテスクな姿になったと云われている。

―何れが真か偽か？　知るは神のみ―。

五絃閑話

水藤五朗

弊害

琵琶界で何気なく行なわれている事柄で、他芸の世界では奇異なこととされ、むしろ、タブーな行ないですらあるとされる幾つかの問題について、私なりの意見を述べてきた。

勿論、琵琶界にはそれなりの歴史的事情もあって、簡単に、他芸や、一般社会の動向に同調し得ない理由もあるのだが、やはり、今後、琵琶を広い範囲の人々に理解して貰うようにする為には、先ず、琵琶界の体質を再検討して、他の視点の批評に耐えうるものを形成してゆかなければ、と思う。

琵琶の妙音に接し、又は、琵琶人の好演に魅了されて、琵琶の道に心を向ける人は、それなりにある。が、しかし、その大半が、琵琶界の弊風とも云える事柄に意を失ない、或いは伸びる芸の芽を縮めてしまっている。

琵琶の隆盛が叶えられるための道程の幾つかが、それぞれの立場から多くの人々によって唱えられ、優秀な琵琶奏者の輩出と、それに伴う多数のファンの出現を、どの様にして導くかがその論旨の中で語られている。今、そうした意見について詳細に触れる事は出来ないが、そうした意見の輩出にもかかわらず現実の琵琶界が、そうした意見を反映させている例は少ない。琵琶界の弊害の第一はここにあるとも云える。即ち、琵琶界の閉鎖性であり、保守性である。

過去三十余年、琵琶の演奏会の大半が、琵琶人と、その同朋者を客席にはべらせて、演奏者が次ぎ次ぎと登場する会であった。勿論他芸でもこれは日常行なわれる会の形式なのであるが、長唄や箏曲、そして舞踊などではこうした会はおさらえ会、又は、温習会と称する勉強会であって、来会者には、まき物、記念品など、ありとあらゆるサーヴィスをして、演者が見て貰う、聞いて貰う会を考えて開催してきた会であった。だが、昭和三十年代後半から、おさらえ会や、一門会の形式とは全く異った純然たる演奏会、舞踊会の波が興ってきて、四十年代はそうした数々の会の運動が、芸の花を咲かせ、新しいファンを獲得していったのが、他芸の動向であった。こうした動きに何の触発もされないまゝ、琵琶界は相変らず、一つの会の形式のまゝで、今日を迎えてしまったのである。こゝにも、琵琶界の閉鎖性を見るのであり、弊害と云っても過言ではないのである。

良い演奏を多くの人々に知らせ、それによって琵琶の興隆を図る事は、周知の方策である。だが、実際の琵琶会に於いて、良い演奏に接する事は難しい。仮りに接する可能性があるとしても、それには長時間の苦痛を要求されることになる。

長唄でも小唄でも、更には舞踊でも、おさらえ会の客席は、常に人々の出入りである。自分の親類縁者の舞台が終れば、人々は間もなく席を立ってゆく、これに対して、琵琶会の客席は静である。かなりの人々が長時間に亘って客席を埋めている。つまり多くの琵琶ファンが席についているのである。これは決して悪いことではないが、こうした人々に支えられる事が日常化され、聴き手の動員を怠る因を生んでしまったとも云えない事はない。

各地、各所で開催される会について、その盛況ぶりが報じられ、又、プログラムの挨拶にまで、そうしたことが記される昨今であり乍ら、琵琶そのものの社会的、芸能的評価と関心に、目立った変化は見られないのは何故なのだろうか。

琵琶界が、一般社会、若しくは、他の芸の世界の動向に無関係で、閉鎖性とも云える状況にある以上、一般社会、他の芸界も琵琶界の動勢には全く無関心で、話題にもしないのが日常なのである。

今、大切なことは、琵琶会の姿が、今日の社会の動向を反映したものになることである。今日の会の姿を見ると、プログラムの印刷をとってみても、現代がそこに感じられるものは少ない。

判で押した様な画一的な琵琶会のプログラムの印刷を見ると、映像化社会、即ち、カラーテレビで育ってきた現代の若者はもとより現代を満喫している壮年の人々を引きつけることが出来るだろうかと疑ったりもする。

社会から無縁になる事を望んでいるのならともかく、世に琵琶を広めることを願う琵琶界が、社会、他芸の動向に無関係であることは許されない。琵琶の会についてのみ考えても、演奏会とおさらえ会、入場料の有無、そして著作権の尊重と、その解釈、番組の構成の問題等々、極めて多くの事柄が社会の動向と無関係になされている。

プログラムに「出演順抽選」とあるのも琵琶会の弊害である。出演順抽選とは一体何を意味するのであろうか。当日、楽屋で抽選して決めるのの故、プログラム表記は仮であると解釈したお客がいたが、全く的外れではない。プログラムに出演抽選順と記すのは真に聴衆の為ではなく、出演者、即ち自分たちの仲間同志の合言葉なのである。弊害弊害!!。

短篇　嵯峨の月

嵯峨のわたりの秋の夜や　（中十）帝の仰せに仲國は」

（吟詠）

月は清し嵯峨野のほとり

聞き得たり琴の音　「戸を隔てゝ伝うるを」

（吟替）

虫の音すだく山里を　寮のお馬に跨がりつ

おちの賤が家こちの門　小督訪ぬる道しるべ

遠音に冴えて通り来る（中十変）　訪ぬる人の琴の音か」

峰の嵐か松風か

（今様）

駒引きとめて聞くほどに

爪音しるき　想夫恋」

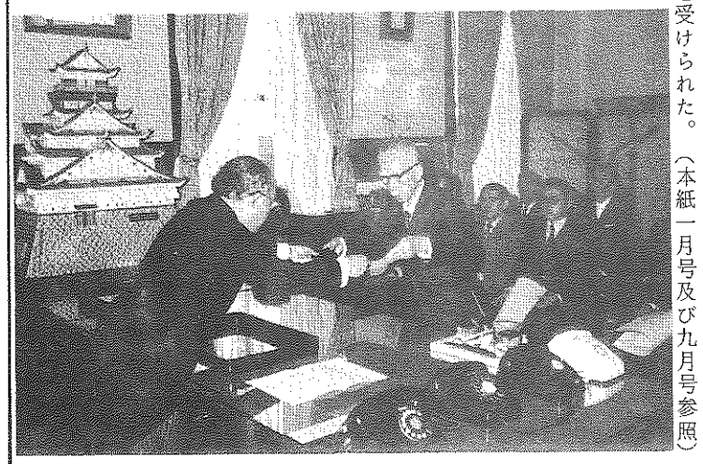
（吟詠）

無限の哀愁　無量の思い

悲歌一曲　人をして憐れましむ」

あわれ小督の佗住居　（止）月に声ありほととぎす』

巻田旭玄氏受章



本年一月岸大阪府知事から紺綬褒章の伝達を受ける巻田旭玄氏。尚昨年十一月には日本赤十字社副総裁三笠宮妃殿下から金色有功章を受けられた。（本紙一月号及び九月号参照）

聖親鸞伝「真理の暁」

無償進呈

編集部

親鸞聖人の伝記については、真宗史家の間に種々論議が交わされ、劇、小説、映画などでも色々に伝わっているが、それらの殆んどは信用の置けない内容のものが羅列されている。そこで京絃社では十数年前に、今は亡き京都東本願寺の重鎮松谷了玄先生にお願いして、専門の学者らが聴いても決して恥ずかしくない琵琶歌を、およそ一年間にわたり研究の上作詞して頂いた。即ち聖人の全生涯を

(1) 青蓮院の桜
(2) 百夜の参籠
(3) 承元の嵐
(4) 雪の越路
(5) 懺悔の涙
(6) 円寂の月

の六曲に纒め、これに一々詳細な解説をつけて『聖親鸞伝真理の暁』と総称した四十四ページの冊子を作成して、その当時希望者に頒布したが、まだ少々残部があるので、京絃愛読の方に無料で差し上げたいと思う。

宗教団体や老人会慰問演奏などにも好適と考えられるので御遠慮なく申し込まれたい。

（送料二百五十円だけ負担して下さい。郵便切手でお送り下さい。）

――（予　告）――

○…都派琵琶秋の公演　十一月四日(木)午後五時東京上野本牧亭、主催都錦穂女史。会員の外来賓七氏出演。

○…京都琵琶協会の紅葉狩　十一月五日(金)午後一時京福電車嵐山駅集合。十一月の例会を兼ねた催しで洛西の秋色鑑賞会。

○…錦心流一水会全国大会　十一月六日(土)午前十時東京銀座ガスホール、主催一水会本部。本部をはじめ全国四十四支部選良出演。

○…赤心流琵琶演奏会　十一月七日(日)午前十時静岡市浅間神社前プリンス会館魚磯、主催赤心流鶴翁氏。会員の外東西の名手数氏協賛出演。

○…洲楓会琵琶詩吟温習会　十一月七日(日)午前十一時東京麻布十番会館、主催洲楓会本部。琵琶約二十曲、詩吟約四十題出演。

○…鶴絃会琵琶演奏会　十一月十四日(日)正午、浜松市立西部公民館ホール、主催小野鶴彦氏。会員二十曲の外来賓五曲演奏。

○…筑前琵琶橘会全国大会　十一月十四日(日)佐世保市民会館、司会佐世保橘会。

○…日琵協関西支部一泊懇親旅行　十一月二十一、二両日(日)(月)愛知県蒲郡市三谷（みや）温泉。附近の名所旧蹟探訪。

上原まり嬢テレビ放映

八月三十日から九月二十七日まで五回の各月曜日午後八時から四十五分間NHK教育テレビふるさと歴史紀行「探訪・源平合戦記」で、平家の栄華から須磨、一の谷、屋島の合戦、そして壇の浦での滅亡までを駒沢大学水原一教授その他の解説、ナレーター・リポーターの上原まり嬢が要所要所に筑前琵琶の弾奏を交えながら放映して聴観衆に立体的な印象と興味を与え、同時に琵琶楽の宣伝に大きな効果を挙げた。

京都琵琶協会の例会

①物凄い台風十八号来襲の余波を受けて風雨急な九月十三日(日)午後二時本部平井会長宅で開催され、出来上った十月十六日の秋季演奏会プログラム（十二頁、演奏曲目ごとに歌詞内容の解説付）の各方面発送準備に一同従事、そのあと二、三研修演奏があって楽しい芸談中に夕食を喫し七時散会した。出席者＝

馬場鴨水、林旭萌、梅原旭濤、矢吹旭津美、山岡旭清、安住旭康、牧秋静、桜井旭冨、水内嫢水、平井春嶺、高橋正雄、福島弥生、植村寞水の諸氏。

②十月三日(日)昼本部平井会長宅。平井、水内、木下、牧、山岡、梅原、田中、楊、林、馬場、高橋、福島、山田、植村諸氏列席。爽やかな秋晴れで気分すがすがしく、小督ー明嶺▼西郷隆盛ー皇水▼紅葉狩ー鴨水▼白虎隊ー嫢水▼井伊大老ー旭清▼上杉謙信ー春嶺、以上演奏のあと協議に移り(1)十一月茶話会は洛西で紅葉狩、(2)日琵協関西支部の一泊懇親旅行（以上予告欄参照）(3)来春の演奏会は丸太町七本松に新装の京都市社界総合センターにて開催、(4)十月十六日演奏会の具体的打合せなどをして乾盃、夕食後散会した。

堺開口神社八朔祭献奏琵琶会

九月十二日(日)昼大阪琵琶同好会協賛。合奏五絃弾ー一岡▼羅生門ー松本旭峰▼新選組ー矢野旭信▼松の廊下ー島津旭都▼四條畷ー米原旭智▼若き敦盛ー西田旭正▼扇の的ー石田旭忠▼白虎隊ー西村旭正▼常陸丸ー朽木旭正▼堅田落ー福本旭静▼院の庄ー野々村旭幽▼小栗栖ー小林旭湟▼秋風故郷の山ー辻旭城▼乃木将軍鹿島詣ー石橋旭嶺。外に詩吟剣舞等。

筑前琵琶日本旭会全国大会

秋風さわやかな九月十五(木)十六(木)両日朝十時から姫路市民会館に於て姫路旭会（会長西川旭操女史）司会、姫路市教育委員会後援のもとに華々しく開催された。第一日は第一部「寿の曲」以下二十四曲、第二部「舞扇鶴ケ岡」以下二十一曲、第二日は第一部「寿の曲」以下二十曲、第二部「伽羅の兜」以下十九曲、合計八十一曲を姫路旭会をはじめ大阪、鹿児島、長崎、金沢、小倉、神港、岐阜、東都、防長、備後、岡山、神戸、大津、横浜、筑紫、浪速、八代、筑前、相生、熊本、東京、八幡、肥後、福岡、大阪中央、門司、明石、東大阪の各旭会から延二百十八名の独演、合奏、歌絃分離などに琴、尺八、舞踊、茶道、華道の各専門家の伴奏を組込み、筑前琵琶ならではの優美絢爛を呈し満員の聴衆を喜こばせ、第五十二回本年度行事に有終の美を飾った。尚十七日は総会、懇親会が催された。

竹原喬之助舞の会に琵琶演奏

九月二十三日(木)昼夜二回鹿児島県文化センターで琵琶舞踊「石童丸」「義経弓流し」に水藤五朗氏演奏、千七百人収容の大会場満員。

日本琵琶悠絃会九月例会

九月二十三日(祝)昼東京中野区大和町地域センター。門琵琶合奏ー山崎錦幽、八束一峰▼故西村晶峻先生追悼歌夢うつつー錦幽▼新選組ー伴旭友▼俊寛(上)ー中村洲心▼彰義隊ー清水源城▼湖水乗切ー金尾秀水▼白虎隊ー青木早水▼濤陽江(上)ー一峰▼竜の口ー橋本草水。末賓仲川秀邦、喜多村一城両氏。五時終了。

木原綾子女史の栄誉

三笠宮憲仁親王殿下名誉会長御就任記念特別演奏会が現代邦楽研究会の主催で九月二十五日(土)昼東京三宅坂の國立劇場で開催され最前列の宮様をはじめ岸信介元首相ら多数の貴顕神士を前に、長唄清元など一流芸能人に伍して木原綾子女史が錦琵琶「扇の的」を大皷、小皷、笛の伴奏で熱演し、あとで宮様から吉川英史先生を通じてお褒めのお言葉を賜ったとの事で面目を施された。

ラヂオ琵琶放送

九月二十三日(木)午後三時五分NHK・FMで「湖水渡り」原島旭粧女史放送

九月二十五日(土)午後六時同右で平曲「横笛」を三品正保、土居崎正富、井野川幸次の三氏で放送

藤巻旭鴻演奏会

十月三日(日)十時半東京千代田区大手町農協ホール、主催旭鴻会、後援日本琵琶楽協会ほか（有料）。創立五十周年記念演奏会で一門の外来賓演奏十一人及び琴、笛、華道、茶道、舞踊等多数協賛出演で盛況を呈した。良寛さん一平野・絃旭祐▼箙の梅ー小林・絃旭陽▼宇治川ー岡本旭江▼末練西行ー関田旭祥▼秋風故郷山ー宝井旭寿、横山旭孝・絃旭鴻・笛入▼小栗栖ー古川旭玲、大西旭千恵・絃旭章、旭神▼王昭君ー藤巻旭祐、初谷旭憲・絃旭陽、旭史・琴入▼北の庄ー古川旭神、藤巻旭鴻・